くものいと

第９号
25-VII-1991
関西クモ研究会

桂林紀行

吉　田　真

昨年の９月に西川さん、田中さんとともに桂林を訪れた。クモと洞窟生物の採集のためである。９月１０日、キャシーパシッフィックで香港へ。香港への着陸は怖い。ビルをかすめるように滑走路におりる。しかし、桂林まで運んでくれるはずのドラゴン航空がいっこうに姿を見せない。

西川さんと中国に来るといつもこうである。飛行機が定時に来たためしがない。西川さんはもちろん、その反対のことを考えている。吉田と来るとトラブルばかり、と言うわけだ。相乗効果かもしれない。結局３時間遅れで桂林着。空港には深夜にもかかわらず、桂林岩溶地質研究所の所長である王福星さんらが出迎えてくれた。謝謝。研究所の宿舎に落ちついて一安心。

次の日は１日５０ドルということで契約を済ませ、市内観光。七星公園には森林もかなり残っており、野生の猿が走っていた。この公園のなかにもいくつか、洞窟がある。

桂林最大の観光洞・芦笛岩は、期待に違わぬすばらしいものであった。洞内はこれ以上ないほど侵食されている。天井からは鐘乳石が垂れ下がり、床からは石筍が生えて、不可思議な模様を作り出している。ただし洞窟内は、赤や緑に彩食され、照明されている。この辺がわれわれ日本人の美意識とは異なるところである。

次の日から数日間洞窟調査。穴潜り大好きの西川さんははりきっているが、私と田中さんはあまり熱意なく、入ったり入らなかったり。私は造網性のクモが採

集したいし、田中さんの恋人・コモリグモには洞窟性の種はいないのだ。

しかし、私が潜らなかったときに限って、洞窟では面白いことがあったらしい。七星公園では洞窟性のコガネグモ類（araneid)と洞窟性（？）のヘビが見つかった。このヘビは後日別の洞窟でも見つかったので、信じがたいことながらどうも洞窟性らしい。目が異常に小さく、体の模様からハブの一種と思われる。

乾期ということもあるが、とにかく暑く、雨はまったく降らず、地面はひび割れて、森林は少ない。植物が少なければ、草食動物が少なく肉食動物がもっと少ないのは当たり前である。

当然ながら造網性のクモも異常に少ない。森林がいくらか残っていた七星公園では、Nephila clavata(?), Argiope sp., Araneus sp., Leucauge sp. などが見つかったが、それ以外ではほとんど採集できなかった。

おもしろかったのは造網性のコモリグモ。畑の回りの草地にクサグモのような網を張り、トンネルは地下まで続いている。網に唾をかけると、クモがトンネルから飛び出してくる。驚いたことに、クモは唾をなめている。

草地の地面はひび割れ、焼け付くように熱い。網を持たないコモリグモたちは、川や池の縁にしかいない。それほど厳しい環境なのだ。造網性のコモリグモは地下に避難できるから、このような場所でも生活できるのだろう。網は虫を捕らえる機能の他に、夜露を集める機能もはたしているのかもしれない。

洞窟調査も疲れた頃に、この辺を流れるいちばん大きな川・璃江を屋形舟で下った。川岸には水墨画のような岩山が続き、川には水牛が群れをなして泳いでいる。なかなかいい気分だった。

最後の日の朝は、珍しく小雨がぱらついていた。朝食のあとで私は、生け垣に変な網が張られているのを見た。どうもウズグモらしいが、隠れ帯はない。円形のものは少なく、細長いものが多い。コシキは例外なく木の葉の下につくられている。そしてコシキと木の葉の間に、うす汚れた糸の塊。

クモはそのなかに埋もれていた。「肩」のとがった見たこともないウズグモである。あとでこれは、湖北大学の朱らによって最近報告されたUloborus guangxiensisであることが分かった。

夕方には桂林を離れなければならない。とにかく写真くらい撮ろうと思い、西川さんに太田胃散をもらい、振りかけてみた。写真撮影とスケッチ。ああ、もう

二三日調査できれば！

そこへ田中さんが緊張した顔でやってきて、飛行機は飛ばないとのこと。なんだか良く分からないが、今日は香港に飛ぶ予定はないと言う。さすがドラゴン航空。いや私のトラブル・メイキング超能力か？喜んだのは私で、まったく動じなかったのが西川さん。通訳の王さんがびっくりしていた。こんな日本人を見たことがなかったのだろう。

そんなわけで帰国は一日遅れたが、私は短報をものにすることが出来た。ウズグモ類の分類と生態にがぜん興味がわき、いま世界のウズグモ類の生態の紹介記事を書いている。これだけでも行った価値があると言うものだ。

昨年は中国に２回行き、すっかり気に入ってしまった。食事もおいしい。かなり脂っこいものもあるが。何よりも、のんびりしているのがいい。またぜひ行きたいものだ。

★冬季採集会の記録★

１９９１年２月２３－２４日、兵庫県城崎郡竹野町

参加者：金野晋、加村隆英、西条雄介、田中穂積、西川喜朗、細田みどり、
本庄四郎、山本一幸、吉田真。

地元の本庄さん、山本さんのお世話で但馬自然史研究所を利用させていただき、楽しい採集会でした。このときのようすを西条さんに書いていただきました。

カニスキはうまかった

西条雄介

カニでいっぱいの鍋からは湯気が立ちのぼり、いい匂いがたちこめていた。いよいよ今回の調査行のメーンイベントが始まる。早く放りこんでくれとせきたてるからっぽのお腹とはうらはらに、ぼくは冷静に同席する方々をみて計算した。ああ、今夜はのんびり食べられる。

ぼくは大学でサッカーサークルに入っているけれど、そのメンバーとコンパで鍋を囲むときは、費用のわりに質・量とも貧弱なので、どうしたってみんな必死になり、先手必勝を狙う。

ネギなんか半なまでまだ辛いうちからつつく。わかっちゃいるけど、なくなっちゃ元も子もないから、毎度そうなるのだ。

ところが今夜は、まあ相手になりそうなのは風貌からみて本庄さんぐらいだろうけれど、まさか地元の大の大人がそんながめついことをするわけないし…と、楽勝ムード満点であった。おかげで落ち着いておいしい海の幸を味わうことができた。

昼間の雪中行軍のとき、ジャジャ山のてっぺんで見とれた、青空と一面の銀世界とそこだけ雪がなくて人気もない砂浜にうちよせる日本海の荒波、しかももうそろそろ黄昏。そんなシーンがまぶたに焼きつき、旅情&カニスキの気分であったためか、「海の果汁」はただひたすらうまかった。

全身胃袋と化した僕は、カニみそをまぶした刺身も、カニのだしがしみていい味になった野菜も夢中でつめこんだ。心に通じる道は胃を通っている。いいなあ。

その席で自己紹介のとき、クモとのつきあいとかいう話で、クモに餌をやってそれをクモが捕らえたらよっしゃあ！って快感をおぼえるんですみたいなことを僕が言ったら、ウルトラマンバッジをつけた本庄さんがカニみたいな顔をしてガハハと笑った。でもおじさんの名誉のために正確に言えば、お酒でほおが紅潮している立松和平の髪型をした中日の落合というところだろうけれど。

そのあといちばんおしゃれに見えた加村さんの口から怪獣ジラースの名が登場してきたときには、やっぱりクモをやるような人ははたから見たらどうみても変な奴なんだろうなあと妙に納得した。

西川先生は中国帰りということで、一杯一杯また一杯の雰囲気そのものだったし、吉田先生は故郷が雪国ということでさかんに「のすたるじあ」を連発されていた。夜、鍋を囲んで。ほんのりいい気分。あったかいなあ。

そして、皆さんのってきたところで幸福のダメおし。火鉢の炭火で焼いたカニ。皮を破りすてかぶりつく。そこで皆さんはお酒をひとくちやるのだけれど、こちらは未成年。タテマエ上は食うのみで鍋もどんどんさらっていく。

本庄さんや山本さんにカヌーで川下りの話や、魚とりの話や、海の中をみながら漂い泳ぐ話を聞きながら。やるなあ。ほんとうにいいなあ。僕は食べながらコーフンし、竹野はまあ近いし、本庄さんとこに弟子入りしようと勝手に心のなかで決めていた。

皆さんがごちそうさましたあとも、我一人カニとたわむれ、ついにやっつけた。そして鍋の汁をかけたおじやに、本庄さん家特製の磯の香りそのものの海苔をふりかけて食べた。

こたえられない満足感。こわいくらいの幸せ。去年の今頃とえらい違いやな。浪人している僕の友達は、明後日がいざ勝負の日である。みんながんばれよな。ふとそんなことも考えた。

一年間、結構短かったな。少しは俺も成長したのかなあ。そこら辺はあまり自身がないのでもう考えるのはやめにした。今年は野山で山賊みたいに暴れまくるぞ。そう誓っているので、クモに関しても当分、よっしゃあ！の域は脱しないと思う。

そのあと山本さんのスライドを見せて頂いた。僕は珍しいクモや虫の話より、その舞台となっているブナ林が既に伐採されてしまったというどうしようもない現実に感じたやりきれなさの方が印象に残った。進行形でふるさとの自然が破壊されていることを嘆いて山本さんや本庄さんが語るのを、完了形になりつつある僕は、よくあることサみたいな感じで聞くしかないのがちょっぴり悲しかった。

翌日は雪。まだ降っているのかといつ外を見ても、まだ降っていた。今度は本庄さんのスライドを見せて頂いた。二人のスライドの構成に二人の性格の違いが感じられておもしろかった。内容の方は、というとかすかにしか覚えていない。おい、大学生、それじゃ困るぜ。

そうこうするうちに、もう帰る時間になった。また来たいな。雪のために列車は遅れていて、僕の、竹野駅と京都の東福寺駅を結ぶ、「キセルじゃないよ大作戦」は中止することにした。そういうわけで最後に一句。

降る雪や　買わずとびこむ　はずの帰途

ワスレナグモは湿原にもいる

加村隆英

ワスレナグモはどこにでもいるというクモではない。私自身は今までに大阪府箕面市と茨木市の神社の境内でこのクモの巣を見つけて、採集したことがあるだけである（Atypus, No. 72, p. 30（1978)参照）。そのときの印象以来、このクモは比較的乾燥した、開けた場所に生息しているものと思っていた。ところが、京都の深泥池の湿原でピットフォールトラップによる採集を行った際に、ワスレナグモの雄が採れ、たいへん驚いたことがあるので、書き留めておきたい。

深泥池は京都市街の北部にあり、日本で初めてミズグモが発見されたところとして有名である。この池を特徴づけているのは、中央部に広がる高層湿原（浮島）であり、ここにはミズゴケが繁茂し、少し陸地化した部分には種々の樹木も生えている。また、季節ごとにミツガシワ、トキソウ、サワギキョウなどの花が咲きみだれ、ハッチョウトンボも生息しているたいへん美しいところである。

私はこの湿原で、主にワシグモ類を採集する目的でピットフォールトラップを継続的に設置していた。そのトラップでワスレナグモが採れたのである。採集されたのはすべて雄の成体であった。以下に採集個体数と年月日を示す。

5♂, 13. IX-1. X. 1982; 1♂, 8. X-1. XI. 1982; 1♂, 14-23. VIII. 1984; 3♂, 23-30. VIII. 1984; 6♂, 30. VIII-8. IX. 1984; 8♂, 8-20. IX. 1984; 2♂, 20-29. IX. 1984; 4♂, 29. IX-5. X. 1984.

採集データから判断して、夏の終わりから秋にかけて、雄が巣を離れて歩き回るらしいということはわかるが、その巣はどのようなところにあるのか？　この湿原内に巣があることはまちがいないと思い、それを探すことを試みたが、このクモの巣は地面に穴があいているだけであるから、ミズゴケに覆われたり、落葉が積もっているところでそれを見つけることは容易ではなく、結局、巣及び雌を発見することはできなかった。

ちなみに、この池の東側の林（通称チンコ山）においても、ピットフォールトラップで1♂を採集している（13. IX. -1. X. 1982）。しかし、ここでもやはり巣は

発見できなかった。

トラップは地表徘徊性の種を採集するには有効な方法であり、ときには思いがけないものが得られることもあるが、そのクモの詳しい生態についてはわからずじまいのことも多いものである。ジグモの場合には、その巣があればすぐそれとわかるけれども、ワスレナグモの巣は目立たないので、この湿原に限らず、我々はその存在に気がつかずにいることも案外多いのかも知れない。今後ともいろいろな場所で気をつけてみたいと思う。

私はもう京都を離れてしまって、深泥池を訪れなくなって久しいが、また機会があれば、このワスレナグモの巣を発見してみたいものだと思っている。

——○◎○——

◎前号の訂正とおわび◎

第７－８号に掲載した八木沼健夫先生の「木村武比古先生との思い出」と題する文章は、編集上の不手際のため最後の部分が欠落していました。ここにあらためて、全文を掲載いたします。八木沼先生はじめ会員のみなさまに深くおわび申し上げます。

木村武比古先生との思い出

八木沼　健夫

木村武比古氏と私との交際は古く、初めてお会いしたのは昭和22年の初夏、大阪府博物学会の例会が大阪府立大手前高校で開催されたときである。この会に出席しておられた私達の生物学の恩師千原勉先生から、クモを研究したい学生がいるからとて紹介された木村氏は当時、大阪第一師範学校の学生で18才であった。昭和25年卒業後すぐ泉南郡新家小学校に赴任された。以来クモの研究に専念され、度たび私の家を訪ねて勉強された。

木村氏が初めて研究発表をされたのは昭和26年、大阪学芸大学で開催された大阪府博物学会の例会である。「和泉地方のクモ類」と題して講演された。当時の大阪でクモの名を知る人はほとんどなく、参会の大先生方が、多数のクモの名を聞いて、「動物図鑑にはわずかしか出ていないのに、どうして名をしらべたのか」と驚かれたのは今も忘れない。

氏はその後、大阪市立北田辺小学校・西船場小学校・山之内小学校に転ぜられた。この間に大阪学芸大学定時制へ通って中学校教員の資格を得られた。

現関西クモ研究会の前身である東亜蜘蛛学会関西支部の設立とＡＴＹＰＵＳ発刊に努力された。支部の生まれる少し前に、大阪のクモの同行会を作ろうと言い出されたのは木村氏であった。当時のクモのメンバーとしては、他に故小村忠夫氏（コムラウラシマグモに名を残す）、故山野滋裕氏（大阪で初めてトリノフンダマシの♂を採る）、児島弘氏（大阪で初めてキシノウエトタテグモを発見）、大志茂善平氏（クロマルイソウロウグモの最初の発見者）、木村重仁氏がおられ、大井良次先生と私がその相談役であった。この会は正式に発足する以前に、本部からの希望により昭和27年以来東亜蜘蛛学会関西支部となり長く続いた。世話好きで労力と費用を惜しまず、しかも縁の下の力持ち的存在として尽力された木村氏の献身的な活躍がその基盤となっている。支部設立後も、例会・採集会・学会大会開催などでずいぶんお世話になった。

関東へ移られた昭和48年までの20年間、毎年のようにいっしょに採集に出かけた。いつもなかよく２人で行動を共にしていたので、その土地で兄弟かと思った

人もあった。岩湧山・吉野山・犬鳴山・葛城山・山中渓・箕面・奈良奥山・小豆島ほか数知れず。氏はさらにＪＩＢＰ、大阪市立自然史博物館を始め、その他公的な地域調査にも参加され、また単独で各地に出かけファウナの究明につとめられた。

昭和39年９月のＴＶで「ひるのおくりもの」の時間にクモについて私がアナウンサーと対談した時、子供の話し相手として木村氏の教え子を数人お借りし、この時に使用した映画の撮影には木村氏に協力してもらった。昭和40年５月木村氏は当時の大阪大学教授佐藤磐根博士と共演でＴＶを通じてクモの話を放送された。

氏はしばしばＡＴＹＰＵＳに投稿されたが、その中でも「明治・大正・昭和の小学校教科書に出てくるクモ」（ATYPUS, 46/47, 1968)は力作である。

ＡＴＹＰＵＳ以外に発表された業績として次のものがある。

1951　和泉地方の蜘蛛類（講演テキスト）

1957　クモの観察（理科教育資料として自刊）

1964　理科教材としてのクモについて（自刊）

1964　奄美大島・沖永良部島のクモ（関西自然文化研究会会報(1)）八木沼と共著

1965　動物生態野外観察の方法（築地書館）八木沼と共著でクモの項を執筆

1971　生物農薬としてのクモの利用（杉野久雄教授退官記念誌）

このほか、学校図書発行の小学国語３年上に「ふしぎなクモの糸」の下原稿を作られたことがある。

木村氏はまた教育・学校経営の面でも手腕を買われ、いずれの学校でも次々と重職に置かれた。とくに理科教育には精魂を傾けられ、氏の模範授業風景がＴＶで放送されたこともあった。生徒たちからは「こわい先生だが親しめる良い先生である」とて慕われ、父兄からの信頼も厚かった。氏の教え子の一人である桂孝次郎君は各地でミズグモを発見した本会会員の一員でもある。

昭和４８年に関東に移られ、城南学園の先生になられてからは、浦和・川崎・横浜と居を移されたが、仕事の関係でクモの研究の暇はあまりなかったと聞いている。数年前、東京の旅館でお会いしたのが最後で、あとは時折の文通のみとなった。

今年いただいた年賀状に「本年からは少しは暇もできそうですので、お目にか

かれる日を楽しみにしています」とあり、私もその日を待っていたのに、その後間もなく病床の身となられ、平成元年１１月２４日他界されたのである。いまその良き友を失ったことは哀惜の念に堪えず、落胆はおおいかくせない。

ここに氏との思い出を綴り、氏のご生前のご功績に感謝しつつご冥福を祈ります。

（平成元年１２月　記）